

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別採承認第三五二號
昭和二十九年五月二十五日印刷 昭和二十九年六月一日發行

第二十卷

六月號

淨

土



蓮文

特輯

無常と人生

六月號

傳言板と無常

——時の記念日によせて——

此頃は昔に戻つて、大抵の國電の驛には、傳言板がかけられてゐるようになった。仲々便利なもので、筆者なども若い頃は大いに利用したものである。

ところで、或る驛で、それに書かれてあつた文句の一二を拾つてみた。

「○○さん、六時までお待ちしましたが、歸ります。M子」
ついに姿を見せなかつた彼氏への、萬斛の恨みの言葉を綴つて去つたM子の姿が目に見えるようである。

「K子さん。いつもの所で待つています。N生」
喫茶店の片隅で、遅いK子を待ち乍ら、いらいらと煙草をふかしているN氏の顔が浮ぶ。

どの文句を見ても、その裏から待つ心、いらいらした氣持がにじみ出ている。

私共は平常「時間」というものを意識しない。魚は水を、鳥は空氣を、意識しない。たゞ事あるに至つて、始めてこれを意識する。水が濁れば魚は水面に浮んであえぐ、嵐の中で鳥は羽をすぼめて斜めに飛ぶ。そして私達人間は……？、彼女が來ない。汽車に遅れる。そんな時にのみ、時間の流れを意識する。

死に臨んだ病人が、朝、目をさまして、「ああ、今朝もまた生きられた」と感ずる、その心にこそ、一瞬一刻の尊さがしびれるようにありがたく感じられるのである。時の流れを目に見ること、それが無常觀にほかならない。ランデブーに始まつて無常に終る。これが眞に生きた宗教だと思ふ。(竹中)

六月號 目次

初夏のころ……………吉田絃二郎(1)

釋尊物語(三)……………山崎 宏(29)

無常と言うこと……………佐藤密雄(4)

無常を知る……………西川知雄(7)

無常の底にあるもの……………竹中信常(10)

佛教美術に現はれた無常觀……………小島章見(13)

無常と文學……………魚尾晃久(15)

無常と無情……………眞野龍海(21)

挽 歌……………澤田岳潤(20)

集團出家……………鶴田湛泉(26)

今岡信一夏……………編輯 部(18)

古寺 松前、光善寺……………須藤隆仙(24)

問訪

初夏のころ



栗田 結子

裏の畑の牡丹が一輪咲いた。戦さの前までは紅、淡紅、白、褐色がかつたものと十五六株の牡丹が畑の一隅を占めて、晩春初夏のさわやかな季節感を満喫させてくれたものであつた。

戦さがはげしくなり畑の桃を伐り、麥や馬鈴薯や甘藷を作つたが、梅と牡丹だけはそのままにして置いた。しかし世のなかで變りなかなか植木屋を雇ふにしてもたいへんだし、わたくし自身は土をいぢることはできないからだになつてしまつたので、牡丹は年々に痩せて、影が薄くなつて行つた。

それでも牡丹はなほ残つてゐるからなぐさめるすべもあるが、伐りたほされた二本の桃は氣の毒である。普段は忘れてゐるが春先きになつて武藏野を歩いて、農家のあたりに咲いてゐる桃の花を見れば、伐りたほされた桃を思ひ出す。道を歩きながらそつと合掌したい氣にもなる。

無信心なわたくしも花を所縁として時をり遠い昔の人たちを思ひ出して念佛申すころになることもある。

わたくしの義母は本所の南割下水に住んでゐた。義母は昔御殿に勤めてゐた人で、お行儀がよく、かつて膝をくづしたのを見たこともなかつた。信心深い人で月々の寺詣り

たれかれの墓参りを欠かさなかつた。

義母の家から本所四ツ目の牡丹園までは近い距離だつたので、わたくしと妻は牡丹のころになれば毎年かならず義母を誘ふて牡丹園に出かけて行つて牡丹をもとめてかへつた。四ツ目の牡丹園といへばそのころ東京名所の一つであつた。

大震災の年の春にもわたくしたちは義母を誘つて四ツ目の牡丹園に出かけて行つた。義母はそのころすでに七十を越してゐたが豪華な牡丹の前でわたくしの妻の丸髷のびんを掻き撫でてやつたりした。牡丹園からのかへり道で「あたし昨日谷中のお寺で拜んでゐたら珠數が切れちまつたよ。近いうちに死ぬかも知れませんか」といつてさびしく笑つた。

それから三四ヶ月経つて恐ろしい九月一日の大震災が襲つて來た。義母は被服廠跡で受けた負傷が原因になつて死んだ。十餘年後に妻も死んだ。

年々牡丹の咲くころになるとしみじみと亡き人々のことを思ふ。

螢が一つ庭に飛んで來た。めづらしいことである。遠い日の旅の夜が思ひ出される。

叡山の麓のさる學寮に泊つた夜のことである。

わたくしは晩の食事の後で古風な坂本の町を歩いてやがて小さいな流れのほとりに出た。

十日ばかりの月が黒い叡山を雲の上に聳えさせてゐた。

山の裾は暗かつた。

水のおもてをかすめて螢が飛んで來た。後から後から螢が飛んで來た。

一本の柳の木があつた。柳の枝には幾百の螢がとまつてゐた。

「螢は死んだ人の魂ですつて！」わたくしは、ふと、こんな言葉を思ひ出した。それはいつか、亡くなつた妻が伊豆の温泉町でおびたゞしい螢の群を見て語つた言葉であつた。

「一つ一つの螢が亡くなつた人間の魂なのだ」わたくしは柳の枝にとまつてゐる螢の群をじつと見つめてゐた。すると薄闇のなかを一人の男が近づいて來たかと思ふと

かれは柳に手をかけて二三度力をこめて揺り動かした。螢は不意を食つて草の上に落ちた。

男はいそいで草の上の螢の群を拾つては大きな袋に投げ入れた。

かれは風のやうに來て風のやうに去つて行つた。

かれが提げてゆく袋のなかでは亡くなつた人間の魂がさびしい呼吸をするやうに青白く光つてゐた。

あたくしは學寮の方へかへつて行つた。

あちこちの坊から夜のお勤めの聲が聞えて來た。

家々の前の石垣にしつらへられた龕があり、女たちが一人一人燈明をかゝげ道ばたにしゃがんで合掌してゐる姿を狭霧がやわらかにつゝんでゐた。

見れば龕は高いところにも低いところにもあり、右にも左にもあり、燈明の炎が霧の底にまたゝいてゐた。傳教大師や法然上人の叡山に登られたところから、こゝの山裾の人たちは石の龕に燈明を供へて夜毎に合掌したのであらうか。何にしても夢の世界をたどるやうなところになつてわたくしも合掌した。

浄土トラクト

浄土編集部編

B六、十六頁 價十圓送八圓
五十部以上 二割引
百部以上 一割引

信徒必携

信徒としてせひ之だけは知つておきたい「浄土」の
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・
其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけさ・佛式作法一通
りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文

(寺名等刷込み
二圓増百單位)

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、
かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上二、八圓
三百以上一、五圓
送、五十部 每八圓

大野法道著

五重の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を伝え、
どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説さ
れたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本とし
て大へんよろこばれています。

無常と云うこと

二人の佛教女性の死

佐藤

密雄



(一)

無常とは何ごととに依らず移り變ることだと言われる。その意味では、彼岸すぎから初夏への風物ほどに移り變りのすがたを鮮かにあらわすものはないと言える。然し乍ら、無常の意味は、まことには物事の移り變りを言うのであるが、然し春から夏への景色の變化などを見て、無常のたとわりなどを感じ得るものではない。凡そ言葉には歴史を通じて身につけた語感と言うものがある。季題にするなら晩秋である。無常の花とは言えぬが無常の風と言う。淨土から「無常と云うこと」を書く様に命ぜられた。眞野龍海編輯氏の考えでは、初夏の風物の變りの早さを捉えて、多少の感傷を込めたさざりとした無常談義をさせる考えであつたと思われる。然るにその様な甘い想像をして居た時

ねると、「まあと言う程度に落付いたので、お参りに來たのだ」と言うことだつたので、ではゆつくりと言う譯で引留め、一泊を強い、君も其氣になつて泊つたのである。

中村君が先年、自坊の本堂を作られた時に、私の所にあつた三尊佛をお送りした所、お本尊佛にして頂いた。私の所では、先々代が持佛として居たもので、其後脇壇にあつたので、それが清水の、然も近代寺院建築の標本として建築の雑誌にも紹介されたお寺の本尊にお出世になつたのであるから、私共一家は自祝自慶して居たのであるが、中村君と、恐らく母堂が、氣にかけられ、お禮として、近世の聖僧辨榮上人の極彩色の釋迦三尊佛の三幅仕立を當日持参下さつた。上人の墨蹟は多いが、此様なものは他に類がなく私共には未見の立派なものであつたし、又實相寺の寺寶

に、ほんとうの無常の風が私の近くを吹きすぎた。

五月十一日に鎌倉で、私の先代の十三回忌の法要を営み、中村康隆君にも参會を求めたところ、「義弟が目下重態で行けぬかも知れない」との返事であつたが、十一日午後、その中村が來て呉れたので、「義弟君の病狀はどうだ」とたず

でもあつた由をきき、居合せた人達と共に讃歎し、中村君一家の好意に感謝し、此を中心に夜の更くるを知らず歎談したのである。

(二)

然し無常迅速であつた。鎌倉で中村君が私共と歎談しつづけて居る間に、無常の嵐は中村君の母堂に吹きつけて居た。私は其後未だ清水にお参りしないので、充分に様子を知り得ないが、二三の人からきいた所に依ると、十一日弟君の病氣看護に赴かれた母堂は、其夜おそく、つかれた體を實相寺へ歸られる途中で、路上で發病せられ、苦痛と共に次第にうすらぐ意識をかり立て乍ら、路行く人に「實相寺は何處か」と訪ねられたと言われる。路上にうすくまり、更に勇をこして歸宅せんとされたが、うすらぐ意識は多年住みなれた實相寺を目前にしつゝも、此を確認出来ない状態にまで立至られたのであろう。ついに途上に意識を失われ、明くる十二日朝になつて通行の人が發見して實相寺にお知らせした時は、たゞかすかに心臓が生最後の鼓動をなして居ただけであつた由である。

病人の所へお出になつたので、寺の方々はいつもの通り泊りがけと信じて居られた由であるし、中村君は、病人である弟君の病狀の落ちつきに一安心の態で鎌倉で一夜を過して居たのである。母堂は、住職の中村君の留守なるを思ひ、夜更けを押して歸られたのであろうが、知らず、其れが人生の終りをお本尊様の膝下へと急がせることになつて

居たのである。

中村君の母堂は、「淨土」の育ての親なる中村辨康上人の夫人である。中村上人は長年宗門の要職にあり、其後は淨土を中心に全國を布教されて居るのであるし、子息の中村君は學者で、此二人をして各々の方面で一家をなさしめたのは母堂であつた。特に二人の輝しい功業は大戦前から戦時であつたが、此の間、實相寺を維持して居たのは母堂であり、中村君が清水に歸つた後も、恐しい戦災から輝しい復興に至る間を子息をたすけはげまして、此を完成せしめたのも母堂である。此の母あつて、中村君の努力は功を奏し、此の夫人あつて中村上人の業は成つたのである。夫人の最後は、お體をお寺に運び入れてから脈が絶えたと傳えられる。文字通りお寺に捧げられた生涯だつたのである。私共、母堂のけんきよで然も何人にも親切をおしみなくなされたこと知るものは、今その最後を色々意味づけて考へたい衝動にかり立てられて居る。

母堂の念佛行者であつたことは言うをまたないが、その生涯の尊さは、近代妙好人であつた。

私は五月十四日夕刻、京都の學界に出發すべく東京に居たが、鎌倉から至急電話で此の不幸をきき、驚いた。重態の人が快方に向い、看護の人が急死するとは、私達は、かつて、萩原雲來先生が重態になられ、此を案じ見舞われた渡邊海旭先生が間もなく急死されて、萩原先生が渡邊先生の弔辭を讀まれたことを覚えて居る。其折も生死はかり、難し

と思ひ、此をば無常と言うと思つたが、いつとはなしに此を忘れ、道心を怠つたまゝで居たが、今、中村君の母堂に依つて再度警覺されることを得たのである。三度目とならぬ様に、今日から、道心發起を迫られた感じである。

(三)

京都から歸ると、三河の大樹寺のお貫主、浄土宗の教部長の佐山先生夫人も、五月十二日急逝されたことを知つた。夫人も亦、中村君の母堂と同様に、夫君と子息を功あらしめて居た方であつた。佐山先生は、アメリカと中國の東西をかけて、佛法弘通につとめ、戦後は南方の日本人戦犯者の父として海外に活躍されたが、此をなし得たのは夫人の功に依ると言つても過言でなく、その様な中でお子息を立派な紳士に育て上げられたのである。けんきよに、宗教者の夫人として積功累徳されたのであるが、然も内に識見を藏することも深くあつたのである。人々は接すること親しきにつれて、暖くも美しい品格と叡智に觸れたと言われる。私は未見の方であつたが、知遇を得た人々は、佐山先生を語るには先ず夫人を前提としたのである。佐山夫人も亦、佐山先生やお子息の留守を、徳川家累代の菩提寺なる大樹寺を、守りつゝ生を終えられたのである。

無常とは「移り變りること」と言う様なことではない。死の迫る人生のことである。念死念佛こそ無常の用心である。

中國の笑話

昔、魯の國の者が、長い竿を持つて城門を入ろうとしました。初め、竹を縦に持つて入ろうとしましたが入れません。そこで横に持つて入ろうとしましたが、やはりつかえて入れず困りぬいていました。

たま／＼一老人が通り合せて言いました。

「わたしは聖人ではないが、今まで色々のことを見て來た。おまえさんは、なぜ鋸で真中から切つて、持つて入らぬのかね」と。

その男は、その通りしますと、やつと入ることが出來ました。

或る男が、夜餓かに病氣になりました。そこで門人に火をつけさせようとしましたか、眞暗な夜であつたので、仲々に火打ち石が見つかりません。餘りやい／＼とせきたてましたので、門人は忿然として、

「そんなにせめたてゝも、それは無理と言うものです。眞暗ですからね。何か明りで私を照してくれませんか。そうすれば、早速にも火打ち石を探し出して、火を點してさしあげましょう」と。

昔、漢の人が呉に行きました所、呉の人が笥を馳走してくれました。「一體これは何ですか」と尋ねた所「竹だ」と教えられました。そこで歸つて來て床の簀を取つて煮ましたが一向にやわらかくなりません。その男は、

「呉人はうまいことだましよつた」と妻に言いました。

(中國の古典、「笑林」の一節を通譯したものです。)



無常を知る

西川 知雄

今日は久しぶりに日曜日らしい日曜日です。といいますのは、いつもの日曜日は、いろいろな人と約束してあつたり、種々の雑用に追われたりして、私一人の自由な時間を持つことがなかつたからです。私は津市に職場をもっておりますので、一週に三度ばかりかばんに仕事をつめ込んで、その職場へ通うのですが、今日はひとつ手ぶらの自由な氣持で津の町を見物したり、更に足をのばして久居の町をたずねて見ようと思ひ立ちました。

(7)

ところが、私には一つの奇妙な癖があるのです。私の自由な意志によつて、一つのことをやろうと思ひ立ちますと、必ずそれと反對のこともやつて見たいという心が起きてくるのです。今日も亦、案の定、この癖が出てきました。ひとたび、津の町を見物しようと思ひ立ちますと同時にまた、いや、今日は津の町へ行かないで、たま

の日曜日を家でんびのびと手足をのばして休息したらどうかという氣持が生じてくるのです。行こうか、行くまいか。行こうか、行くまいか。私の心の中で同じことが、何回も何回も繰り返して對立して争うのです。

行つたならば、今日一日の時間は津と久居の町の見學によつて塗りつぶされることになります。

行かないで家にとどまつたならば、今日一日の時間は家に於ける休息によつて塗りつぶされることになります。しかも今日一日の時間は、このいずれか一方だけが許されるのでありまして、一日のうちには兩方とも満足させることは出来ません。ですから、今日行くか行かないかによつて私の日記が、或いは大げさに言つて、私の歴史が、違つた内容の文字によつて書きうずめられることになります。

ということは、行くか行かないかによつて、私は夫々違つた經歷をもつ人間になつて了い、さらには、その内容如何によつて私自身が違つた人間になつてしまふかも知れないのです。例えば、津の町へ行つたために不慮の災難に遇い、私の一生を豪無しにすることがあるかも知れません。家におればそうではなかつたのに。或いはまた、この逆のことがあるかも知れません。

いろいろと迷つた擧句、とにかく津の町へ出かけることになりました。どうして、こう決まつたが私には判りません。殆んど無意識に身仕度をしていろいろに出かけることになつてしまつたのです。

伊賀上野驛を發車したのが七時五十分でした。通勤定期券を持っておりますので、改札口を通るのも、ブリッジを渡るのも、乗車するものも、機械的と言つていい位に無意識だつたのです。

佐那具驛までの車窓からは、昨年の八月十五日の豪雨と十三號臺

風によつて、崩れ落ちた山肌や、兩岸の形も無いまでに削り取られた河川や、一面の砂原となつた田が見られます。自然の暴威によつてしいたげられた山河の痛ましい姿には、自然界の無常がまざまざと見られます。自然の山河も無常の例外ではないとつくづく感じました。

汽車が加太トンネルを出ると、兩側の窓には、若芽をつけた木々に被われた山すそが去來します。若芽の色の種類の何と多いことでしょう。燃えるような眞紅の芽、紫がかつた濃紅色の芽、朱塗りのような芽、褐色の芽、黄色の芽、萌黄の芽、若葉の裏が産毛のような銀色の毛におおわれて微風にひらめいて時々眞白く光る芽等々……芽の色には千差萬別のニュアンスがあります。このような千差萬別の色をもつた若芽が複雑に組み合わされて山全體が一幅の繪のように調和をもつて飾られています。そして春の山の色の美しさは、その木々の若芽のういういしさにあります。生命の溢れ出ようとすゝる若さで彩られた生きた美しさを春の山が持つております。しかし此の若芽も夏の盛りを過ぎて秋になりやがて冬が近づいて來ると、もう全く老衰しきつたような色を見せて、間もなく散つて行かねばならないのです。自然の中に美景を添える木々にもまた無常があるのですね。

龜山驛で一時間ばかり待つて、名古屋からの鳥羽行快速列車に乘換えました。龜山驛まで一緒に乗つて來た旅客の方々と別れて、新たな名古屋からの旅客の人々と同乗した譯です。「袖ふれ合うも多生の縁」とか申しますが、縁によつて同一の客車に乗り合わせるのも東の間、袖ふれ合うような浅い面識を持つただけでまた別れて了うのです。人々は相會し、そしてまた別れて行くのです。「會者定離」

もまた無常の一樣相に外ならないと思いました。

龜山の次に停車したのが津驛です。この驛で下車して、すぐさま驛前に待つていたバスに乗りました。そしてバスを降りたのは「京口立町」という停留所でした。そこから左側へ百米ばかり歩くと警察署や百貨店のある四ッ角へ出ます。この角を北へ少し行つたところに觀音さまがあります。すつかり變つてゐるのに私は驚きました。私が中學生のころ、といひますと今から約十二・三年前ですが毎年夏になると團體で中學校から津の海へ海水浴に來たものでした。その時は確か觀音様の境内にあつた大寶院というお寺で毎年御厄介になつたのでした。あの中學生時代に見た觀音様の境内のおもかげが全く無いのです。きつと昭和廿年の空襲のためにすつかり燒けて變貌したのでしょう。

觀音様の境内には、中學生時代にあつたものが無くなつてゐる反面、その當時に無かつたもので現在是在るものもあります。立派な近代的な映畫館やマーケットはその當時にはこの境内にはありませんでした。人間の社會に於いても、在つたものは無くなり、無かつたものが在つたりして、その變化は特に著しいように思ひました。人間の形成する社會もまた無常なのだと思ひます。

「にえ崎」の海水浴場もずい分變つてゐました。堤防上の松並木は伐りとられ、以前はもつと廣かつたように思われる砂濱がぐんと狭くなつて、波打際がずつと陸地に接近して來てゐるように思ひます。海もまた變つたのですね。えゝ、海もきつと無常なのに遠いありません。

午後は久居へ行つて見ました。久居は戰爭中に私が入隊した聯隊のあつたところです。今から三年前、電車から見たときは、聯隊前

の練兵場は一面に耕されて畑になつていました。今日行つて見ると亦すっかり昔のように練兵場になつていました。二年位前から、この跡地に保安隊がはいつてゐるのです。この練兵場は私の苦い思い出の數々を含んでいます。初年兵のときは、汗と涙を流しながらこの練兵場を駆け廻つた——いや、はい廻つたと言う方が正しいかも知れません——ものです。

この練兵場も、陸軍練兵場、耕地、保安隊演習場と三轉して變化してゐるのです。國家事情、國際事情がこのような練兵場の三轉をもたらしただけです。國際事情もまた無常なのです。

歸途久居驛で昔の戰友のH君に遭いました。「Tは戰死、Sも戰死、Oは政界で活躍してゐる。Mは材木業をやつてゐる、……等々」とH君の話は盡きませんでした。一期の檢閲まで共に苦しんだ同年兵の戰友達も、その後、それぞれの道を歩いて行つたのです。ここにも人間の無常が感じとれるような氣が致しました。

歸宅致したのは午後の七時半過ぎでした。ささやかな夕餉の後で、今日一日に見聞したことを靜かに反芻致しました。そして自然界も人間社會もすべて、小止みなく移りかわつて行つてゐることをつくづく感じました。自然の山河も、木々も、海もみな無常の様相を示してゐました。觀音様の建物も、町も、練兵場もやはり無常を感じさせました。そしてかりそめの旅客運も、或いは戰友達も無常でした。萬物が無常であり、諸行が無常でありました。

このとき突然、私の腦程に一種のひらめきが生じました。それは今朝私が「行こうか、行くまいか」と迷つたことを思い出したから

です。今日はとうとう津と久居の町へ行つて了つた。従つて、今日は一日を家で休息するということはどうも起らなかつたのです。ところがこれが反對だつたらどうだろうかと思つて見たのです。即ち、今日は一日中家にとどまつていて、津へも久居へも行かなかつたら事態はどうなつていただろうかと考へて見たのです。

家にとどまつていたならば、今日實際に見聞したすべての事柄は私に起らなかつた筈です。私は違つた經驗をしてゐる筈です。しかし今日の夕餉を終つた私は、津や久居へ行つたにしろ、或いは一日中家におつたにしろ同じ今日という時間を費やしてゐるのです。すなはち、津や久居へ行つても、或は家にとどまつていても、どちらにしても、ひとしく同じ時間が私から消え去つてゐることに氣付いたのです。有限な生命を持つた私から、私の生命の一部分が、即ち一日という「時間」が消え去つてゐるのです。私が津へ行つても、久居へ行つても、家にいても、はた何處へ行つても、私自身の足もとから私自身の「時間」が同じ速さで消えてゐるのです。私は一日分の時間だけ老いたのです。

私は今までは、無常というものを私の外に見ていたのでした。山河や木々や、海や練兵場や、旅客や戰友という私の外界たる自然界や社會や人間に無常の相を見ていたのであつて、それら外界の無常の相を見てゐるところの當の本人たる私自身が無常であることに氣がつかなくつたのです。私が津へ行こうと行くまいと、私自身の足もとから同様に時間が消えて行つてゐるのです。無常は遠くにあるのではなく、つい私の足もとに無常があるのです。否、私自身が無常そのものの相なのです。このことを私が知つたのです。

無常の底にあるもの

竹中信常

「昨日また、かくてありけり」

今日もまた、かくてありけり

このいのち、何をあくせく

明日をのみ、思いわずらう」

……

五七調の、このクラシックな詩の一節は、いうまでもなく、藤村のものである。若い頃、その隨筆と共に愛唱したのが、今もなお脳裡に刻みこまれて、少しも薄らがずに残っている。

昨日、今日、そして明日。このつながりの繰りかえしの中で、泣きもし、笑いもし、怒りもし、喜びもいつと、人間は生きている。時は流れている。だが、その流れを、流れとしてみる時、そこには單なる移り變りのほかに、何かあるのではないだろうか。藤村ではないが、「明日をのみ、思いわずらう」前に、眞實にこの時の流れの底にあるものを見究める必要があるのではないだろうか。

私は、私なりにこれを考えてみたい。

諸行無常

平家物語の冒頭に引用されている此の一句の意味は、文字からうけるセンチメンタルな印象とは逆に、現實を直視せる峻嚴さに溢れている。行とは行爲でもあり、同時に行爲から生れた色々の出來事でもありと解したい。万物は流轉する、とは古代ギリシヤの哲人も言っている。私共の住む世界は運動の世界である。一刻の休みもなしに動いている。小さくは、私個人の生命も、大きくは地球も、更にはこれを包む全宇宙も、すべて同じく、偉大なる力をもつ「時間」によつて押し進められている。増一阿含經に次のように書かれてある

「或る時世尊は一人の比丘の質問に對して、少しばかりの土を爪の上にのせて、その比丘に示して言つた。『比丘よ、たつたこれだけの物象といえども、常恒永住にして、變易せざるものとは、この世に存しないのである。比丘よ、もし爪にのせたるこの土ほどの物象にても、永住常恒にして變易せざるものが存するならば、わたしの教える清淨の行に住することによつて、よく苦を滅しいくすと

いうことは出来ないであらう」

一片の土をも、巨大なる山塊も、いかなるものも、此大いなる時の力にあらがうことは出来ない。すべてがうつりかわつて行く。

「常」ではない。「止」でもない。非常であり無常である。陥々たる川の流れは、一秒の澁みなく流れてゆく。よし、それを堰止め得たとしても、それは單にひと時の間にしかすぎぬ。水流は、そのようにはかなくも、こざかしい人力を嘲笑うが如く、やがてまた、堰を教えて溢れ流れるであらう。而も人々は、この愚かしい企てをなしつつける。人は非常・無常を好まずして、「常」に執着する。常は安定であり、安逸であり、むさぼりである。特に、暮しも豊かに、年令も初老に達すると、人は非活動的になり、常住を好む。……然しそれは許されない。老ゆれば老ゆるままに、富めば富むままに、尙且つ人は、そして萬物は無常であらねばならない。この「常」たらんとする人間の欲望を、現實の流轉の事實を直視することによつて打破すべきことを教えるものが「諸行無常」の一句である。

「およそ物の無常にして苦なる、變り移ろうものを、それはわが有である。それは我であると認識することは……正しいことではない」(相應部)ものの姿を、あるがままにみる、如實にみる、流れ行くものを流れ行くものとみる、これが先ず第一に大切である。

諸 法 無 我

法とは、此場合現象、及び現象が生み出す物質(存在)であると考えておきたい。西洋の近代哲學の根本は、デカルトの「われ思う故に我あり」という自意識にある。どんなものでも疑つてみる事が出来る。然し、たつた一つ、疑つているということ、従つて疑つてゐる自分は、これを疑うことは出来ない。このように歐米の思想は、疑うことの出来ぬ自分から出發して個人主義、自己主義を主張するようになった。ところが佛教は、これとは全く逆に、「自分」というものを否定することから出發している。

そこで、佛教の立場から、他のいかなる存在よりも確かであると考えられる「自己」というものを、ふりかえつてみるとする。極く常識的に言つて「自己」とは何か。肉體か、精神か。肉體は刻々に變化している。従つてそれに宿る精神も一瞬々々變つて行く。或は他人に對する「自分」か。それならたつた一人で住む人には、自分がないのか。こう考えて來ると、自分というものは何處にもなくなつてしまふ。あるものは、只「自分」と思われる「在り方」だけである。言葉をかえていえば「自分」というものは、肉體と精神との或は自分と他人との、或は個人と社會との「關係」又は「結びつき」にのみ存在するのである。釋尊はこれを假に五蘊(五つの要素)の集つたものであるとされた。集合體であるからには、時にはまたバラバラになることもある。一つにまとめているものは「因縁」即ち因果(關係)の法則に外ならない。従つて、「自分」とは何か物のよ

うに、個體としてそこにあるのではなく、五つ（又はそれ以上）の要素が、組み合わさつて、一時的に現われた「關係」にしかすぎない。いわばそれは「統一的自我」に外ならない。「無我」とは、我をなくすことではなしに、此様な「關係」の中に我を見出すことなのである。

かくの如くに、佛教では「我」というものを、西洋哲學に於けるよりは、ヨリ可動的に可變的に、いわば無常的に考えるのである。そして、佛教でいう「我」とは、單に自分という意味だけではなくものの「本質」ものの最終の姿をも意味している。それ故、この世界の本質は、個體化され、實在化された「存在」や「物」にあるのではなく、すべてのもの、又は出來事の「關係」にあるということが出来る。

涅槃 寂靜

涅槃（ニルバーナ）は「滅」という意味である。歴史の上からは釋尊が八十才でなくなつたことを涅槃というが、その眞意はそれだけに止まるものではない。滅とは四諦（苦・集・滅・道）の一つであると同時に、佛道修行の理念でもある。それは凡ゆる欲望の絶滅を意味する。欲望ある處執着を生じ、執着すれば迷いを感じ、争いをし、怒り憎しみに馳られる。そこに人生の苦が展開して来る。逆に、諸行の無常なること、諸法の無我なることを體得するならば、

どうして滅を苦となし得よう。滅とは「なくすこと」「否定すること」ではなく、すべてのものを「解き放し」「自由にし」「ありのままにする」ことにはかならない。凡ゆる官能から、凡ゆる欲望から、自分を解き放して、ありのままなる「自分」を知る、それが滅であり、従つて「樂」であり、寂然不動でもある。この境地こそが、佛教が悟りの境地として求める、變らざる、移らざる、動かざる寂靜の眞理なのである。

河邊に立つてみる。水が流れている。寸刻の休みなく、流れ來、流れ去る。「無常」である。そして考える。河とは一體何なのだろうと。そこに流れるものは水、水を支えているものは堤、これを感じているものは河床。そのいずれも、一つとして河ではない。河とは水と堤と河床とが結びついてゐるに外ならない。「無我」である。――だが、いくら河の水が流れようと、河の本質が關係であつても、ではなとも、眼前には河がある。水の流れのそのありさまは、如實に河である。無常であつても、無我であつても、その底には、とに角「河」がある。然し、この場合の「河」は單なる河ではない。河そのものであり、それは寂然として、みはるかす地平の彼方まで悠久の時をたたえて横たわつてゐるのである。

本稿は本來中村康隆氏にお願いしたものであるが、同氏の御母堂の急逝により、その開を得られなかつたために竹中氏にお願いしたものである。中村氏御母堂の西化を悼みつゝ寸言お断り致します。

佛教美術に現われた 無常觀

小島 章 見

一

私共の心の生活について、佛教特有の考え方に、無常、無我という教がある。美しいある一つの刺戟(色)が、私共の眼に寫り(受)、私共は印象(想)を形作り、それを心の内に傳(行)える。その結果私共は美しいと分別(識)する。それが私達の生活の姿である。ただ私共の肉身はこの五蘊(色受想行識)十二處が假に和合し、相續推移してゐる姿にすぎないのであるにかゝらず、本當の私と考え、それが眞の私の生活だと誤まつた考え方をする。「美しい」、「醜い」、「好きだ」、「嫌いだ」と言つても、私共は「々の刺戟を受け入れる瞬間に事象を分別するに過ぎず、従つて、それは常に去つて消え行くものである、變化するものであり、壞れて行くものであるから、それは常住でもなければ、眞我でもないのである。されば一切現象の無常と、一切諸行が、無我なることに覺め、例えば、清く見える毒水にも、欺かれなければ、死を逃れることができる様に、本當の肉體生活(日常生活)の場において「己れが」「己れが」という我執とを受執とを斷滅して、寂靜の心と、智慧とをもつて素直な生活をするにあらんと考える。

二

日本佛新美術史上で、佛教に説く、無常觀を強く象徵するために、宗教的色彩の濃い地獄とか、餓鬼など(六道)の繪の描寫に最も意を注いだのは、鎌倉時代の初葉のことである。代表的作品に、地獄草紙、餓鬼變紙、病草紙、北野天神緣起(日藏六道廻の段)などの繪巻物がある。日本の中世という時代は、新たに人間の本質を、無常觀と、罪惡觀の醜惡の面から人間を理解しようとした時代であり、またこれに對應して、絶對他力主義と、來世主義に立つて、法然上人、親鸞上人が、新しい人間救済の宗教を發見した時代である。

三

六道思想を畫いた佛教美術として、古くは奈良時代に東大寺二月堂光背毛彫圖中に地獄圖が見出され、また平安時代には、「佛名會」に地獄變屏風が盛んに使用され、藤原宮經中にも、例へば中尊寺紺紙金泥一切經の大般若經卷六十三の見返圖中にも三惡道の繪圖が描かれている。然しこれらの地獄繪圖は、觀察的立場から、厭離心をかきたせ、わずかの人々に、止惡修善の宗教的實踐の價值を教えたにすぎなかつた。そうしてかの鎌倉時代初期の作品に見受けられる様な、あの凄慘な地獄、奇怪な餓鬼の畫圖からうける無常觀に眞向から對決していく眞剣な氣魄は未だ現はれていない。従つて、平安王朝時代の人心には、例へば清少納言が、地獄變屏風を見て、

「ゆゆしういみじきことかぎりなし、これみよとおほせられれど、さらに見待らじとて、こへやにかくれてふしぬ。」(枕草子)

と、その醜惡な地獄の畫圖に對して、嫌惡の念をいだいて眼を

そむけた様に、また、寢覺物語繪卷を觀賞してみても、左大將が、不如歸の一聲を聞いて、

「うき世にはわれ住みわびぬほとゝぎす、死出の山路にしる
べやはせぬ」

と歌をよみ残して、女のもとを立ち出づるところに相當する畫圖を見ると、「詞書」の如くどこからともなく、かはづの聲もきこえて、二三株の木々からもえいつる若葉のにはいにむせかえるが如き心地がするなかを、ふと見ると簾を透して、火影あかるき室内に女の後姿を見るばかりであるといつたいかにも初夏の夜のなやかな景色を、うまく描いている點など、全ては猶現世的悅樂への執着がそこに捨てきれなかつたことを知るのである。つまり鎌倉中世の人心と異なり、藤原文化には、耽美主義的な時代思潮と淨土影現思想があつたのである。

四

平安末期の保元平治の戦亂以後、やがて鎌倉時代に入ると、今迄の貴族的支配權も榮華の生活も一邊に否定されてしまつたのである。末法思想は深く身に感じ入り、平家一門の滅亡と、源氏のたいとうと世相はめまぐるしく轉變していつたのである。もはや人々は如何に人間的意思の無力であるかはつきりと自覺するに至り、絶對的無限の前には何等の價值をも現世はあたへるものでないことを理解した。こゝに「濁世惡業」、「六道輪廻」、「盛者必滅」、「會者定離」の言葉通り、現實的體驗を通して、無常の理りが如何に眞實性をもつたものであるか鎌倉初期の人々は、最も重要なことゝ考へたのである。最早、地獄の樣相も、餓鬼の醜相も、病氣の厭相も、別の世界のものではなくなり、この現實のものとしてうけとるようになり、佛教美術

においても醜惡なる象徴藝術の形において、無常觀を表現し、救済の世界を欣求したのである。

五

鎌倉新佛教は人間の罪業に對する救済の力を絶對者であるところのかぎりなき如來に求め、如來よりそれは流れ来るものであり、私共に來迎するものであり、私共はその本願に攝取されるのであると確信するに至つたのである。かくて生死海の苦しみに辛吟する人間の姿をとらへて、これを救済しようとした法然上人は、

「いはんや無常のかなしみは目の前にみり。いづれの月日をかをはりの時と期せん。さかへあるものも久しからず。いのちあるものも又うれへあり。すべていとうべきは六道生死のさかひ。ねがふべきは淨土の菩提也……生老病死。愛別離苦。怨憎會苦。一事もまぬがる事なし。たとひこれらの苦なからんすら三惡道に歸るおそれあり。心あらん人はいかがいとはざるべき。うけがたき人界の生をうけて。あひがたき佛教にあふ。此たび出離をもとめさせ給へ。」(法然上人要義問答)

と、かく無常觀を前提として出發した、人間救済の宗教を淨土念佛の教に見だされたのである。

こゝに日本中世史の時代思潮の特色がうかがはれると同時に鎌倉時代精神が、決して無常という現實世界から唯單に逃避するのではなく、現實の無常と人間の罪惡を機縁にこれに眞向から立ち向つてその姿を凝視した點である。佛教美術においてこれが來迎圖となり、地獄草紙、餓鬼變紙、病草紙となつて現はされたのである。

無常と文學

魚尾晃久



無常——やけに多い佛教語の中で、これほど聞きなれた言葉はない。常識的には、悲しい寂しい余韻を胸の一隅に残して行く言葉である。アニタヤ——梵語の音韻のもつ響きも暗い。が、それだけに實は私どもの生活に身近な感じを與える。だから、文學の中に取り入れられた無常は少くない。好むと好まざるとに拘らず、私どもの生活は無常——いつも變化の中に生滅しているはかないものである。特に深刻な事件が起きた時ほど私どもはこの感じを深くする。従つて、無常の論理は、佛教がなくても、一つの悲哀感として昔から人は持っていたのであるが、佛教がそれを理論づけ、且つその對策を教えてくれた。一體、感傷や悲哀は、人間が一様にもつ情緒の中の著しいもので、辛い悲しい現實に耐える態度は、早く萬葉集にある。

(15)

吾が旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむ吾が妻かなしも

唐衣裾（かき）に取りつき泣く子らを置きてぞ來ぬやおもなしにして

前の歌は、自分が防人（さきもり）となつて旅に出るのは止むを得ない旅だと思えば、苦しても辛くても我慢しあきらめることも出来るが、自分のいなくなった後、家に残った子どもたちを育てなければならぬ妻は、その苦勞のために瘦せ細ることであろう、防人に激發された自分の妻は氣の毒だ、という意味で、旅中の自分の苦痛を忘れて、ひたぶるに妻を思う心が實に痛々しい。うなだれて、駄々と笑いを忘れた作者の姿が目に見えるようだ。

後の歌は、更に悪い境遇にある者の作品である。その内容は、防人として召されて國を發つ時、自分の着物の裾にとりついて泣き悲しむ子どもたちを残して來たが、その子供たちは母のない孤兒なのだ。一體どうなるというのだ。悲愁と困惑の情に涙を咽はしめるものがある。

防人の歌は、萬葉の中でも特徴のある存在だが、悲哀感を中心としてみる時、それは別離の哀傷が主題となっている。それを齎す契

機は防人という西邊防備に赴く命令による。彼等は矛盾の克服ということには疎く、義務の觀念に強い純眞な人間性に於いて嘆き悲しんだのであった。彼等は、はかなさを解決する方法を考えなかった。たゞ慟哭があるだけだった。この作者の時代は佛教が渡來してから既に久しい。しかし、彼等には、無常から淨土へといった思想性格を自分の内部に持つほど、その存在は解放的でなかった。個性はき生ける屍とも言得よう。だから、生地本能的な悲哀をのみ作品に残した。彼等から千余年後に生れた私は、補充兵として太平洋戦争に行つた經驗をもち、陣中、防人についての感懷を書いたが、理論的に無常と對抗し得る方法を、發露し得る個性と技術とを持ったことに考及して、ひそかに合掌する心を禁じ得なかつたのである。

二

國民文學といわれ、文學に於ける中世的世界を現している、とさへ規定されている平家物語は、また代表的な佛教文學でもある。祇園精舎の鐘、行無常の響の冒頭から佛教的であつて人口に膾炙されているが、平家物語の人々は知りすぎるほど無常觀に徹していた。それだけでなく、それに對應する方法を中世的態度で知っていたのである。清盛に飽きられた妓王・妓女が投身しようとして、それが五逆の罪であると母に論されて蟻蛾の奥山に入つて一向專修の念佛生活に暮す物語、後には佛御前をも混えて「四人の尼等皆往生の素懷を遂げるとぞ聞えし」と一應の佛教的結末がついている段、或は「戒文」や「維盛入水」に於ける法然上人や龍口入道の説論による

物語——即ち、三位中將重衡は「唯深く信じてゆめ／＼疑をなし給ふべからず。もしこの教を深く信じて行住座臥時處諸縁を嫌はず三業四威儀に於て心念口稱を忘れ給はずは、畢命を期として、この苦域の界を出で、かの不退の土に往生し給はんこと何の疑かあらむや」と示されて隨喜の涙を流し、維盛は「還來穢國度人天少しも疑あるべからず」とて、忽ち妄念を諫している。現實否定に對してとるべき佛教の方法は見事に與えられていた。無常は文學の重要契機であつた。全卷に取り扱われている歴史は、榮枯盛衰の典型で至る所に無常の感懷が事實として語られている。現實を否定して永遠なるものを求めようとする理念が主流をなして、平曲として語る者も聞く者も直視するに耐えない否定的精神に居すわつて彼岸の世界を求めている。

平家物語の全體の構想は、華かな清盛の全盛の外には没落し消滅してゆく側面に力が注がれているが、それも第一の思想の據り所として佛教の世界觀が浸透しているからである。どんな天才も時代を超越することに出来ない。平家ほどの強烈な無常の文學が起つた背景に、佛教の無常觀が力強く動いているのは、指適するまでもない。新しいものは、未だ來らざる無としてののみ存在した。

三

明治・大正に到つて、樋口一葉・幸田露伴を最後として文學作品から佛教的色彩が影をひそめてしまった。倉田百三や松岡讓の作品はあつても、文學と佛教との交渉はうすれた。西鶴や近松の作品理

解には相當の佛教的教養を必要とするのに對して、現代文學は佛教とは無縁になった。人の世のはかなさは現實度を増して、ありきたりの佛教的理論づけでは人々は首肯しなくなった。老人たちの、残り少い余命への慰安の具となった。無常の現實に對して、若い人々は勞動組織を通して闘う方法を実行した。無常の解決は、目前にあつて、直接生活に結びつかなければ意味をもたなくなった。宗教は存在理由なしと、退けるものもあるし、弱き人々は、いかゞわしい所謂新興宗教に救いを求めて馳つた。しかも佛教は存續しつゝある。そしてそれは、善根喜捨サービス精神の限界をこえた新しい姿で、一部の作家精神と學者の思想との中に、改めて形成されつゝある。寺院の住職は經營者ではあつても、必ずしも佛教徒ではない、という聲が高い。眞摯な佛教學者たちは在家佛教を主張して本來の釋尊に還ろうとしているし、文學の分野では、人間の凄絶な眞姿が描かれつゝある。

はかない現實に直面した時、人は誰でもその解決案を聞える。そして、現代ほどその深刻味の強い時はない。それにも拘らず、何處に本當の宗教があるのか、誰が誠の信仰をもっているのか、わからにくい。方便的な在來の説教や、悟りすました僧侶の態度にも、もう飽き／＼して來た。それらにかゝらわっているよりも、私どもは、自分の中の惡さを、知らない風をしていれば通りすぎてしまふ罪を、掴まなければならぬのではあるまいか。罪を犯さないふりをして、自分を繕ひながら生きて行くのが人間の姿なのではなからうか。佛教徒といわれる、佛や經典を口にする人の中にかえつて

それが多い、といへば過言であらうか。私どもは出来るだけ惡さを掘りさげる所に佛教的眞實を感じる。救われたような便宜的な整理は無用である。丹羽文雄の「青麥」の一節に「七十年ちかい僧侶の生活は、救はれるどころか、救はれない人間であることを思ひしらされた。若い時代には、入信すれば安心が得られ救はれると思つた。……が煩惱を一度でもさっぱりと殺したことがあつたらうか。かれは自分が、驕猛な情欲のとりこになつて、飽くことを知らない人間であることを知つたゞけである。」と書いている。はかなさに對する悟り、それは表面のきれいごとにし過ぎない。人間の體姿の探究、丸裸かになつた事實の露呈、それがなされようとしている。はかなさははかなさ事體において取り上げようとする。何ものによつても糊塗粉飾されない本體の追突が尊い。武田泰淳の「ひかり」も、不條理な人生の凄絶な心理を描き切っている。救われたならば、客觀的にそれが實證されれば文句はないのであるが、とたんに救われたからといって人間的善意になれるものだらうか。いま、人生の追求が、丹羽文雄や武田泰淳によつて佛教的根據からなされようとしている。はかなさは現實的な感覺をもつて、文學の面に問題化されつゝある。往年を左翼運動に過した椎名麟三は、キリスト教の洗禮を受けたとかいうことである。人間心理の複雑さが、何よりも作家たちによつて現實との關係づけの深さの中に掘り下げられつゝある。大きな飛躍である。飛躍とは、周邊を高い水準に導く。國民文學としての、第二の平家物語の如きものの出現が期待される。

名士訪問

今岡信一良

—歸一教會—

編輯部

芝の正則高等學校の校長室の一室。應接室とも、事務室とも分らぬ粗末な部屋に、溫容微笑をたゝえて今岡先生が書見して居られる。歸一教會生みの親である先生は、又多くの生徒達の親しい父でもある。記者は、御多用中を、新しい宗教に情熱を注がれる先生に色々御話しを聞く事にした。

歸一教會とは

「歸一教會の教義とか、信條とかそんなものは……」

「別に之と言うものを持つて居ません。勿論、綱領の様なもので、」

1、反省懺悔して、神佛を拜し、隣人を愛し

理想社會の實現を期す。

2、古今東西聖賢を尊ぶ

など、五條を設けてありますが、之に依つて別に信者を拘束することはありません。

私は、理想として、個人的に信仰を持ちながら、單なる融和團體としてでなしに、或る廣い信仰のもとに、融和し行ける事を念願としています。従つて、佛教でも、キリスト教でも、神道でも、何でも信仰して居られる方は、その信仰を持ち乍ら、尙高い理想社會實現の爲に、宗教的融和をして行く事が、本教會の意義とでも言うものでしょう。

例えば、日本宗教聯盟なども融和團體ではありませんが、それは單に、教派共通の仕事をやると言うだけで、一寸本教會の考えている事と違います。所謂、妥協でない本當の融和のもとに、理想社會實現に向うことです」

「その理想社會とは、どんなものを」

「そうですね。ここの所は、漠然として居る様で、神の國とか、或は淨土とか言はるべきものなのでしょうが。政治的經濟的、むすびつきなくしては、今日理想社會實現等、假空の様なものと考えられましようが、今の所、その段階にまで立到つていません。精神的融和の域とでも云う所でしょうか」

その、話し振りは誠に溫順である。熱血漢的國士でなく、諄々と説いてうまぬ聖人のそれに似ている。その漠然たる所が、又その廣い抱擁力なのかも知れない。これが果して、宗教法人であるか否かと云う事についても、相當文部省では、問題になつたとか。

人生歷程

「この様な信仰を持つ様になつた動機とは何か」

「まあ、私の生涯そのものから生れた五十年の結論としてでしょう。私は眞宗の信仰深い両親の下に生を受け、佛教的な素養を得ました。中學の時、英語を習う爲、宣教師について、キリスト教の信仰に向い、佛教よりも合理的な様な氣がして、總てを信じました。しかし、キリスト教の説く奇蹟が信じられなくなつて、再び佛教に歸ろうとした時、信心雜誌の海老名禪正氏や、六合雜誌などにより新らしいキリスト教の解釋に出合い、正公會で洗禮を受けるまでになりました。その後大學を卒業して、神戸で牧師を三年程やつたのですが、どうも牧師に荷せられた責任としての信者獲得に疑問を持つ様になつたのです。是が非でも改宗させて、キリスト教に入れねばならぬと言う理由に疑問を持ちました。」

或る信仰を持つて居れば、それはそれでよいではないか。そうしたものを持つてをり、或る宗教的な世界で融和して、協同の理想を追求出来るのではないか、そう思うと牧師家業が厭になつて止めてしまつたのです」

「もうそんな所に、今日の歸一教會の萌芽がありますね。」

「その後、東大の宗教學研究室に歸り、姉崎正治先生のもとで助手を四五年し、後先生がハーバード大學に行かれたにつき、矢吹さんの後を受けて、米國で助手をしながら神學の研究をしました。歸國後は、ユニテリアン教會に關係していましたが、たまたまメーソノ氏が來た爲、一緒に神道の研究を十年程やり、神道との關係も、この時出来る様になりました。」

先生のこの人生歷程を見れば、自から歸一教會が出て来る道程が分る様である。

「昭和十四年來、この學校に來て、宗教々育のかたわら、宗教運動をしている次第なんです。」

「しますと、この正則高校等は、ミツシヨンスクールと言う事になりますか」

「まあそんなんでせうが、今の所、それ程はつきりした宗教々育をしていません。花ま

つりとクリスマスをする位で、校友會活動の中に宗教部もありますが、餘り生徒にも關心がない様です。もつと積極的に經典讀書とかコーラス指導をやればよいのでしようが、特別の協力者もないままに放つてあります。」

切角の先生の理想も、こゝではこの程度でしかないとは残念である。それでも週の木曜には全校生徒に訓話があり、宗教講和をして居る由。よき指導者と協力者を得て、次第にそうした活動も出ることであらう。

教會活動

「教會活動としては何か」

「いや、それ程大々的なものではありません。ただ日曜には日曜禮拜をして、講話をします。今の所、信者と云つても、七十人程で自由にして頂いて居ります。餘り漠然とし面白くないと歸つて行く人もありますが、又その漠然とした所がよいと言つて来る人もあります。毎月「創造」と言う新聞を出して、信者にくばりますが、これは、日本自由宗教連盟機關紙として出しているもので、この中には、無我愛教會と、日本自由キリスト教會と本會とが入つています」

「何か地方支部の様なものは」

「今の所ありません。しかし、同様な目的

で、地方でも集まつて頂ければ、それでよいわけです。」

理想社會建設に

「教會の將來の希望とか、或は事業計畫の様なものは」

「大いにありますね。夢の様なものですが、兎も角、こうした連盟に入る可能性のある宗教團體はたくさんあるわけですから、こうしたものは總合して行きたいと思ひます。例へば、友松さんの神田寺の如きものも、そうした意味では協力頂けるのではないかと思ひつています。そしてこれを更に世界的な機構にしたと思ひつています。現に米國とは、相當連絡も出来、そうした希望を申し出て居る者もいます。従つて、世界全體の宗教運動として、國際的な宗教にまでしたいと思ひつています。」

今や世界は、國際連合の機な組織を政治では持つていますが、そうした傾向にあります宗教でも又それが有り得てよいのであり、そうした國際的宗教の先驅的方向を、この宗教に持たせる積りです。そうすることにより世界平和への大きな事を信じています」

「元來無量壽大食でしてね、ハッハッ……」

と笑はれる先生の心底には、量り知れぬ世界平和の希望が被打つている。

挽歌

昨日まで恙なかりし人もはや

今日腦溢血に物いはすなり

うつせみの世は會者定離地上には

青葉若葉の緑もゆるに

朝霧のなかに立ちたる表机の

山門不幸の文字はかなしも

ものいはぬ枕頭にありて我はたゞ

誦經念佛繰返すのみ

通夜はて山の夜道をかえりくる

山河の瀬はせゝらぎ高し

静岡縣

澤田岳潤

これの水愛鷹山のふもとより

湧きて流る水にてあれり

夜のくだち山河の瀬のかそけくて

なき人おもふよすがなりけり

はふりの日薫風かほりあめつちは

世にありし日の徳をたえり

導師は増上寺法主の代理にて

水冠の金紋緋衣にかゞやく

遺骨を寺城に埋め舍利禮を

となへまつれば山にこだます

無情と無常



海龍野眞

今假に、有名人にアンケートを出し、あなたはどのような場合に最も無常という語の感じを強く受けましたかと、いう回答を求めたならば、恐らくは大部分、人の死、物事の甚しい盛衰等に於いてだという答が多いと思います。

無常は或意味でセンチメンタルな無情という意味を込めて考えられてはいはないかと心配します。

之は當然そうでありましょうが、佛教のものととの無常という事は、もつと嚴しい意味から生じた事であるのを注意してみたいと思う。

うたかたの人生

無常ですぐ念頭に來るのは、之は「はかない」、「淋しい」「悲しい」という言葉であります。無常の嵐といえは人の死を意味するのです。無常堂といえは死に近づた僧を置く堂でもありました。又、釋尊の死を説く大涅槃經でも無常は特に取扱われております。

中でも日本に佛教が傳わつてきて、之が特別、ものがなしい響きを與えて今日に至つておる事は注目されてよいでしょう。

それはいろいろな原因が考えられ、或は國土風物が四季の變化に豊かで、榮えるものは日を経ずして衰える事が目に見えて著しかったり、佛教が一般大衆に理解されやすくなつた平安末期以後、格別世の中が有爲轉變の極にあつたり、日本人が、佛教の教理を感情的に受容した事などを挙げられると思ひます。それにも増して、之を反映して文學に出てくる無常觀が、又逆に反射して我々の血の中に繼がれてきた事が大いに影響していると考えられます。

かの有名な鴨長明の方丈記巻頭の「よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまる事なし……」云々の名文等によつて代表的な我々の祖先の無常の解釋風を窺えます。長明は建暦二年六十五歳で之を書いたと言いますから、法然上人の一枚起請文の時と略同じであります。彼は思うにまかせぬ

世間から日野山奥に隱遁し、西の壁に阿彌陀像をかけ、落日を受けて眉間の光となした――

つまり、西日が夕べの禮拜をする自分にふりそそぐのを白毫の光として往生を願うたところ解されました。文學の上から申せば、世捨人のもつ悲哀感が、泌み出て美しく、畫ともなり詩ともなるものです。悲劇は悲劇として美であり、エロティシズム、ロマンティシズム、夫々に一つの文學の分野を形作つていくように結構であります。

しかしながら、問題となるのは佛教で本來いう無常が、こう言つた文調で出て來ますとうっかり、本筋が見失われはしまいかと言う事です。

つまり、佛教は無常を説き、この世ははかないから、其から逃げ出したり、頭を圓めたり、超然としている如くして無爲に過したりただ後生のみ願う事を讀んでいるのではないかという疑念が生じてくる事です。

之は、長明はじめ、當時鎌倉頃の作家が、本來の無常のもつ意味のある一面を抜き出し

美しく詠嘆した事によるものです。

無常のもつ意味

そこで長明の文の由來を考えますと、千載和歌集の釋教歌に、維摩經十喻此の身は水の泡のごとしといえる心をよみ待りけるとして「ここに消えかしこにむすぶ水の泡の浮世にめぐる身にこそありけれ」の歌が指摘されております。この歌は、佛教で無常を言ひあらわす一譬喩として使つたものを詠んでゐるのです。所が維摩經は、はかない浮世という事が眼目でなく、次に述べるように、物は本來、固定してあるものでなく、そのように見る態度とか、欲望を無くして、すつきりとした無我の心に住しなくてはならぬという事を説くものであります。

之が、元來一面の眞理しか持たない譬喩から、千載和歌集へ飛んで、更に長明に三段飛びして、大きく、その一面だけが出て來てゐる事を如實に物語つております。世情・人心に加えて、厭離穢土欣求淨土の教も、之の裏

附けであつたでしょう。

最も古いお經では無常は、私共の心に把えられた物象とか、それをキャッチする心とか心の動きが、どれも永續せず、無常であり、無常なものは變化するもの、つまり、いつも變らない我というものが自分の上にない事であつて、従つて、全ては空であり、その上に立つて、我々も行爲しなければならぬ、というふうに説かれるものなのです。無常を裏がえすと無我となる大切な佛教の旗じるしなのです。無常だ、はかない、から逃げろという教は一つもありません。釋尊も、苦行林から、この世間に下りてこられたし、法然上人も山から里へ降り立つて惱みを共にして強く生き通された事は此上ない私共の手本であります。

一つには、無常だ無情だといつて逃げるか傍觀するか、又は無常を諦め、無常を截つて強く本當の我に徹するかが、無常の本來の意味が誤るか誤らないかの岐路と言えるでしょう。

これについて、面白い話を最近聞きました

環境心理學の話

波多野完治氏の話。昔は環境に人が支配される、人が環境を作るといふ二面であつたが最近もう一つ、意識環境という事が言われている。つまり、電車の中でも本が讀めるといふ事は、やかましい中では本が讀めないし、又人が電車を静かにする事もできないが、人が意識し努力すれば、そこに環境が自己に於て出来るという面を取上げて論ずるようになった。面白いのは、鐵のカートンの向うでもこちらでも言われている事だ。事のおこりは精神病者を扱つていて、喧ましくて眠られぬというので、静かな所へ移したら、今度は静かすぎて眠られぬと言う、そこで丁度よい所に移すという事になるのだが、正當な人ならどこでも眠れる事から、この自己の努力によつて或程度自己内に環境を作る事が出来るという事に氣がついて、この論になつたわけだ。之は勇氣とも努力とも意志の力とも譯されて

いるが、まあ、意志と合致する所が多い。スイスのアドラーと弟子のフルチュが言い出して、ソ連、フランス等あちこちで言われている。

私は佛教の事はよく知らないが、こゝ言つた事は確かにあると思う。二千餘年の昔の教の中の話が、今になつて、同様の事がマルクス哲學の上に言われてたりしている事は興味のある事だ——と。

私の話はこの話を續くと、無常という環境はそれ自體どうにもならない。だが、其の流れにツツ立つて強く生きる自分が問題である。

戦争中、寒翁の馬であつた私も一應、召集となり、召集イコール死という常識に自分を収めていた。或夜、停車場の柱にもたれて、ぼんやりと電車の来るのを待つてみると、ふと驛の大時計の秒針が、キラキラと反射しながら、カチカチと私の所にまでひびく音を立てて時を刻んでいるのに氣がついた時、胸をしめつけられるように一寸刻みの生命である

事を今更ながら感じた。逃れようもない嚴然たる事實だ。

口惜しい程、嚴然たる無常苦を目の前につけて、人の開眼と聖道への努力を説かれた佛陀なのである。

法句經に

世は常に燃ゆるに

何の笑い何の喜びだ

闇に覆われいて

何故に光を求めざるや

とある。

無常は、グルーミーな自己滅亡でなく、光ある眞我開顯の警笛なのであります。

F・F・D 幻燈機

○映寫機（ふつう映寫機と同じ性能）

ミナシキ……………一二八八〇圓 送五〇圓
マスター……………一三五〇〇圓 送四〇圓

○スライド（フィルム）

各巻三、四〇圓程度、數百種カタログ進呈

○本會代理責任取次

寺 善 光 前 松

仙 隆 藤 須

利
訪
問
名

松前の名は古くから北海道文化の發祥地として知られている。

過ぐる一日、私は觀櫻を兼ねて松前光善寺を尋ねてみた。

光善寺は北海道の古刹で、わが淨土宗にあつては北海道最古の寺である。開創については地元の郷土史研究家は天正初年頃（一五七六—一五七八）といつてゐるが、同寺の沿革は天文二年（一五三三）創建という事になつてゐる。いづれにしろ三十年ばかりの年數は問題外として四百年近くになる古刹が北海道に存するという事は、色々の意味で普通の事と簡單にかたづけける事は出来ない様である。

坂道を登つて數段の石段を前に古ぼけた仁王門が建つてゐる。この仁王門は今から約二百年前の寶曆元年に十八世順理上人が建立したものだそうである。門の前の兩側には右に五尺位の石地藏、左に徳本行者御筆の名號碑がそれぞれ建つてゐる。名號碑は文政二年念佛講中が建立したものである。

仁王門をくぐると兩側は墓地である。此處にある墓は相當古いものばかりである。だが松前という處が現在では經濟的にも全く廢落してしまつて、舊家などは家をたたんで他の地へ移轉するものが續出し墓も無縁となつて

いるものが大半であるという。

更に進むと鐘樓門がある。鐘樓門には「准檀林」という額がかけられてゐる。額といへば仁王門にも「北海道場」という額がかけられてゐる。修行道場としての寺の存在價值について何かしら私は深く考えさせられるのである。

鐘樓門をくぐると正面に本堂がある。本堂は明治三十五年に焼けたもので現在のものは假本堂である。本堂の左手に經藏がある。その扉などは極彩色で殿様の御廟を連想させる。

經藏の上方に石の大きな釋迦佛像がある。この大石佛は天明三年の正月十六日の夜、町で火災があつた時、積雪の爲芝居小屋がつぶれて多數の死傷者を出してしまつた。その犠牲者の慰靈の爲に建立したものだそうである。

この寺の一番の名物はなんといつても「血脈櫻」である。これは本堂の前の廣場にあつて、其の廣場一ぱいに枝を廣げて全く我れ獨りの世界とばかり美しい花を咲かせていた。八重櫻で花も非常に美しい。

これを「血脈櫻」というのには深いわけがある。

昔この地に靜枝という美しい娘がいた。(誰の娘だつたかは色々の説があるので、此處ではふれない事にしておこう) この靜枝がある時上方見物の旅に出た。途中吉野に遊びそこで美しい尼僧と知合つた。靜枝はその尼僧に強く心をひかれ。そこで靜枝は其の尼僧より櫻の苗をもらつて持ち歸り、其れをこの地に植えた。

それから何百年かが流れた。櫻は春になれば美しい花を咲かせたが、靜枝はこの世を去つてしまつた。

爾來幾星霜安永年間に御堂改修する事となり、この櫻を伐り拂う事とした。ところが其の前夜住職の枕もとに立つたのは振袖姿の靜枝であつた。靜枝は「櫻をどうぞ伐らないで下さい」と住職に願つた。住職は靜枝の亡靈に血脈を授けて迷わずに往生せよと回向した。あくる朝、この櫻の木に前夜住職が靜枝に與えた血脈がさがつていた。

この櫻の伐採が中止されたのは勿論の事である。今にこれを「血脈櫻」というのである。

又この境内には義經山という小石がある。

小石といつても、二人や三人でもつ事の出来ない程のものであるが、この石には義經山という字が粗雑に刻まれている。義經が北海道へ渡つたなどという傳説のあるところから、義經が矢尻をもつて書いたのであると言ひ傳えられている。

又アイヌの墓がある。北夷蝦夷地勤番の藩士で清水平三郎なる者の世話で建てられたものであるが十余名のアイヌの名を記している。南無阿彌陀佛の名號も中央に刻んでいる。

松前という所は北海道というより、むしろ内地といつた感じの所である。椿が非常に多く櫻と一諸に椿の花も見られ、早いのは三月彼岸頃から咲くというのである。まるで伊豆大島へでも行つたような感じだつた。

寺も非常に立派なものが多く、しかも由緒ある寺院が一所に半圓を畫いて建てられているので誠に壯觀である。

光善寺も元和七年後水尾天皇の年、參内を遂げ從來高山寺と稱していたものを、勅意により高德山光善寺と改め、「高德山光善寺」なる寶翰額を頂いている。この額は焼失して現在には存しない。更にこの寺は舊松前藩の藩

主菩提所の二つに數えられたのである。單に北海道のみならず、廣く淨土宗一般から文字通り名刹とされ可きであらう。

松前家十世矩廣の早生女又はその側女、同十一世邦廣の生母等もこの寺に眠つてゐる。だいたい於てこの松前は、北海道に於けるかつての首都ともいふ可き所であるのに、昨年迄は非常に交通の便が悪く、随つてあまり一般の人からは實際觀賞されていなかつたのである。

昨年ようやく汽車が通り、一時に大くの人々が舊都を見んものと押かけたのであるが、この地に歩を運んだ人は皆一様に其の櫻の數多い事と(松前にはあらゆる種類の櫻を全部集めてあるといわれる)お寺の立派な事とに感心しているようである。

歸りに住職松浦瑞雲上人よりこの地の名物「福山のり」を頂いて恐縮した次第であるが淨土愛讀の皆様も、もし御縁ありまして北海道へお出の際は是非松前へお寄り下されば少なからず得る所があると思ふのである。

尙書き遅れたが、この寺には磐城林蔵寺の良觀の筆になる大涅槃圖あり、又本尊阿彌陀如來は惠心僧都作と傳えられている。

集 團 出 家



鶴 田 湛 泉

遠流の赦免下つたとは言へ、法然上人が未だ洛中の往還を許されず山深い攝津の勝尾寺に隠棲を餘義なくされてゐた時のことである。承元二年の秋も、濃く更け、紅葉した葉にも霜が降り、肌寒さを覺へる十一月八日のこと、

「頼まう」と庵を訪れた三十前後のいやしからぬ武士があつた。信空が取次ぎに現はれて、用件をきくと、

「上人さまに、是非お目にかかりたい」と願つた。

やがて上人の前に座して、敬虔な態度で両手をついた武士は、
「それがしは、鎌倉殿に仕へる宇都宮彌三郎頼綱と申すものでござるが」

と、自らの素情を物語つた。

下野守の頼綱は、幕府の家人として一方の旗頭であるばかりでなく、關東の名家で、時政の女婿として政子を義姉とする赫々たる名門であつた。

その上、歌道とも深い嗜みあつて、歌人としても名を知られてゐた文武兩道の達人であつた。

彼の話るところによると、こうであつた。

かつて頼綱、家の子郎従をつれ、威武堂々と、武藏國を通つた時の事であつた。

その頃、關東の地を遍歴して念佛勸化してゐた僧形姿の熊谷と途上でゆくりなく出逢つた。

「おお、熊谷どの久しうござる」

馬上から聲をかけた。

「頼綱殿か、いみじき大勢の行列でござるの」

「我等武者の習ひとして守り固くせねば」

「アハハ……固く守らねば、何時敵に襲はれ、命が危しと言はるるか」

「いかにも」

「あはれ、いかに大勢にて守るとも、無常の刹鬼はいかがふせがるる所存ぢや。彌陀如來の本願にて念佛する者は、惡道におとさずむかへとり給をことなれば、一人當千のつはものにも勝るものは、只念佛でござる、かまへて念佛申されよ」

豪快に笑つて言ひ終るや、後をも見ず念佛稱へながら、飄乎として立ち去つて行つた。

鎌倉で頼朝に會つた時、兵事の事をきかれても、先づ出離生死、欣求淨土の事をのべ語つたと噂されるだけあつて、日本一剛の者と言はれた熊谷殿の變り方よ、と、去り行く後姿を、頼綱は、呆けにとられて見送つてゐた。

近頃どうしたわけか、頼綱謀叛の心を抱いて、一族郎黨を引見して押し寄せるとの風説が鎌倉へ傳つた。

幕府はさてこそと驚いて、尼御臺所の御亭では、大江廣元等を中心として前後策が評議された。

直ちに頼綱追討のため召された老寵臣、小山左衛門尉朝政は御座の前に乎れたてゐた。

廣元は

「近頃謀叛を抱くものが相つぎ、關東の地とかく靜かでないのは誠になげかはしき次第である。今又頼綱奸曲を巧して將軍家を謀ろうとしてゐる。思ふに朝政の先祖は、將門を追討して武勳あつて以來、下州を護つて其の職は相續いてゐるのみならず、先きに志太三郎蜂起の時は之を撃つて武威は都鄙に高い。それに目下國內の頼綱

驕奢となつてゐるに何故それを鎮めないのか、いや直ちにこれを攻め滅せ」

と追討の命を言ひ渡したが、朝政は

「頼綱とは日頃昵懇にしてゐます上、彼の教を始終受けてゐますれば、嚴命承つて追討の兵をさしむける事は情に於ても忍び難きものがございます。何卒この命は他に仰せつけられとう存じます。然し叛逆の志などさらさらございませぬ。彼若し攻め來るときは斷じてこれを降すに力を惜しむものではありません」

と、その打手を辭退した。

事の意外に朝政は、すぐ頼綱を呼んできびしく實否を糺した。頼綱驚いて北條相模守義時に起請文を獻じ、謀略など思ひもよらざる由陳べ、その無實なる事を案じ、且又朝政も狀を相副へて好意あるとりなをしたので、やつと事なきを得た。

然し、この事あつて以來、彼の心は鬱々として樂しまなかつた。

彼は、鎌倉に生涯誠忠を勵まうとしてゐるのにかかわらず、二心ありと見られたのが心外でならなかつた。

その上、勢力の消長浮沈、興亡盛衰をまざまざと世相に見て、この世のたよりなさ、あさましさ、もどかしさをひしひしと感じ、混み入つた感情にとらへられた。

どこにも常住のすがたのない、何ものにも最後の信頼をもつ事の出来ない思ひして、自分をしつかと抱いてくれる大きな力を欲した人の心の頼りなさ、いや自分の心にさへ、たのむべき中心を失つてゐるのも無理はない。

その頃老獪な執權北條時政は、一世の辣腕を振つてゐた。頼家を幽し、比企氏を滅し、終に元久三年七月には、頼家を誅してしまつた。それのみか、鎌倉幕府を築くに當つて頼朝の股肱の臣として功多

かつた老臣は、相ついでしりぞけられ、その上いたましい最後を遂げてゐた。

權謀にたけた梶原景時も既に誅され、建仁三年九月六日には、仁田四郎忠常は加藤次景康のため誅せられてゐた。元久元年十月十日には、和田義盛の訴によつて進士入道行綱は囚人となつてゐた。元久二年六月廿二日には、無二の重臣であつた畠山重忠父子でさへ、叛逆の心ありとせられて攻め亡ぼされてしまつてゐた。畠山父子の追討には頼綱も一方の驍將として兵を進め戦つて來た自分であつた。

だから一度鎌倉から猜疑がかかつて睨まれては、決して寢覺めのよいものではなかつた。

怖ろしい人間同志の虚構や陷穿、餘りにも人の心の頼りなさに、薄氷を踏む如き世上の有様に、胸のいたくなる思ひがした。

風雅な道に通じてゐた彼は、快々とした胸を、せめて歌心によつて慰めまぎらさうとしたが、駄目であつた。男三十のウツボツたる勇心は押えきれず不快な氣持は拭ひ切れなかつた。

彼は、皆が牛をつないでのびのびと一つになれる世界を憧れ初めた。すると熊谷の出家した氣持も初めて分るやうで、あの時の事が目の前に浮んで來て、熊谷がたのもしく又羨ましくなつて來た。熊谷への恩慕が奥底にひたむきに湧き起つて來たので、一度逢つて見たいと思つたが、既に熊谷は三年前に往生を遂げてゐないので、いかんともする事が出来なかつた。

とかくするうちに、禁裡を守護する大番に當つて上洛したのを幸ひ、日頃の苦悶を解決せんものと上人を慕つて勝尾寺に、その門を叩いたのだつた。

上人は、念佛の道を詳かに説き與へた。

「上來定數兩門の益(往生の大益)を説くと雖も、佛本願に望むるに、こころ衆生をして、一向に専ら彌陀佛の名稱へしむるにあり」

と、念を入れて二度まで誦されて、この文の意をよく解して念佛されよと、大悲に生きる尊さを物語つた。

溫客な上人の唇からついて出る一語々々は、彼の耳に深く響いた。人生の浮沈消長は、今や彼の何の意とするところではなかつた。一念ごとに呼べばこたへる彌陀の大願に攝取され護念されてゐる事を知つて、もはや彼には、何の不安も、心のもどかしさもなかつた。喜に對する一切の懷疑もなく心は澄み渡つていた。

無事大番の任を務め果して下野へ歸ると、家臣に「如來の大悲に生きるため週世の志を述べ終ると、佛門に入つて頼朝の靈に佛燈(ミアカシ)を捧げ鎌倉へ二心なき事を示すため髪を下してしまつた。

頼綱の大きな喜びに共感を催したのか、一門郎從六十餘名も、直ちに彼に従いて髪を切り出家してしまつた。

やがて下野國領内各所につぎつぎと念佛堂が建てられ、念佛の行者が國中にふへて行つた。

實信房蓮生と號し、嵯峨小倉山の麓に山莊を構へた彼は、念佛三昧と歌道の精進の生活に入つていた。

其の附近に歌道の偉材たる定家郷の中院山莊もあつた事とて、歌を通じて定家との交友も深まり、

息づまるやうな世間の生活からのがれて、本願力にいだかれたつよい法悦につつまれた賑々たる強い希望に生きる明朗なる人生があった。

彼の山莊の近くと歌道の偉材たる定家郷の中院山莊もあつた事とて、歌を通じての定家との交友も次第に深まり、彼の娘に定家の子爲家に娘する間柄となつた。

上人なき後は、善惠房證空に師事して西山に草庵を結び、夫妻ともに他事なく念佛勵み、三尊佛像を夢中に感得したと云はれる程隨喜の生活に入つてゐた。

釋尊物語 (三)

文學博士

山崎 宏



六、祇園精舎

——スダッタ長者——

釋迦の生れたカピラ城の西に當るコーサラ國の都、舍衛城にスダッタという長者がいた。非常な大金持であつたらしいが、それと共に大へん情ふかい人で、病人に藥を施したり、身よりのない人や、

孤兒などにもよく施してやつた。スダッタ長者は、毎年商賣の用事か何かで、マガダ國の都の王舍城に出かけ、知り合いの家などに、世話になつて歸るのが例であつた。

そこで今年も例によつて、王舍城のゴミーという仲よしの長者の家に、とめてもらう約束をして出かけた。ところが、どうしたものだろうか、今年はゴミーの家は、上を下への大さわぎで、出迎えのものもなければ、家についてもろくな挨拶も出来ないという有様である。實際日頃は、ほうきも持ったことさえないゴミー自身が、まきわりをするという始末に、スダッタ長者も驚いた。大したお客様でも來るのか。いや、これはどうしても、嫁が來るんだなと思つたが、よく聞いて見ると、明日お釋迦様が千二百五十人のお弟子をつれて、お出でになるのを、お迎えする準備中だという話だ。

「お釋迦様とは、カピラ城の王子、釋迦族の賢者で、出家して本當の覺者佛陀になられた方です。種姓階級の如何を問わず、お救いになり、出家修行も許して弟子として下さるのです。」

とボツボツ話すゴミー長者の言葉を聞いている中に、スダッタ長者は、次第にこり奮して來た。もともと社會事業に心を盡し、信仰の深かつたスダッタ長者は、この世にそんな有りがたい佛様が、お出でだと聞いては、ジツトして居られなかつた。もう日暮だというのに、スダッタ長者は、釋迦がいま竹林精舎に居られると聞いて、一人でそこに出かけた。

歩いて見ると、路は意外に遠い。その中に夜半になつてしまつた。スダッタ長者は、ただお釋迦様に會いたい一心で、追いはぎでも出そうな眞暗い夜道を、かけるようにして歩いた。その時、スダ

ツタ長者は、何者か自分を導いてくれるような氣がすると、遠い前方にほんのりと、光明が認められた。ずんずん進んで行くと、その光明の中から、早くも起きて修行している出家の尊い姿が現われた。近づくにつれ、誰に聞かなくとも、それがお釋迦様だということとは知られた。スダッタ長者は、よろこびあふれて禮拜した。

釋迦は、やさしくスダッタ長者を、身近かに招いて、さまざまの教を説かれた。それは主に、出家せぬ社會人のための法であつた。第一に慈善のために布施すること、第二に行い^{せむ}つつしみ、戒^いを守る持戒^{じけい}のことなどが中心であつた。長者はよろこんで、この佛教に歸依し、家に在つて信仰することを誓い、それから、在家信者としての心やすさから、よも山の話にうつつた。

「私は舍衛城のものです、今まで及ばずながら、慈善事業をたのしみ、給孤獨^{きくどく}とあだ名されています。どうぞ一度お出で下さい。もしお出で下されば、お室から、食事・衣類まで心配しましょう。」

「舍衛城に精舍(寺)があるかね。もしあるならば、弟子たちと共に、行つて見たい。」

「まだ一つありませんが、若しお出でとあれば、すぐにも精舍を建てましょう。」

と。こんな話を交わして、長者は心楽しく、釋迦のもとを辭した。

——祇園精舍建つ——

スダッタ長者は、王舍城で商用が終ると、大急ぎで舍衛城に向かつて。道みち長者の頭の中は、ただ精舍を建てることで、一杯であつた。家に歸つても、誰かれとなく會えば、そのことを話した。な

るべく近くて便利のところ、夜も晝も静かで、それに健康地でなければならぬ。そうしたよい場所はないものか。と探し廻つた。その結果、どうしても祇多^{ぎた}太子のもつてゐる林園より外に、この條件にピッタリ合う所はないことがわかつた。そこで長者は、無理だとわかつてゐたが、一心になつて太子に、賣つてくれるようかけ合つた。

「スダッタ長者よ。いくら欲しいといつたつて、あれは賣れないよ。長者、あの林園の隅から隅まで、金貨を敷きつめて、ごらん。それでもやれんよ。」

「いや、よろしい、太子様、私は今おつしやつた通りいたしますから、是非どうぞ賣つていただき度い。」

太子は、じよう談でも値段をいつたのは、しまつたと思つた。一心になつた長者は、押問答の末、自分の金庫をほとんどあけ、金庫をつんで象にひかせ、林園に敷き初めた。片はちから並べ、もう少しというところで、金貨がなくなつた。長者が、この位ならば、どの倉をあければ丁度いいかなあと、考えているところに、太子がやつて來た。すごい金持ちもあつたものだが、太子もこれを見て、ひそかに驚いた。しかし、ここで一つ、からかつてやろう、という氣になつていつてみた。

「長者、どうした。金がおしくなつて來たか。」

ふり返つたスダッタ長者は、どこまでも眞面目だつた。

「なんの、お釋迦様のためなら、金貨など少しも惜しくくないですよ。今どの金庫をあけたら、あと丁度いいかと考えているところなんです。少し待つて下さい。すぐに敷きつめますから……」

といつた。これには祇多太子も感じ入つた。スダッタ長者も長者だが、それにしてもお釋迦様という方は、そんなに大した人かなあ。ここに精舎を建てるといつていたが、この土地だけで、こんなに大金をばらまいて……どうも大したお方らしい。こう考えて來た太子はいさぎよく言つた。

「よろしい。金貨はこれで十分だ。この空地はこのままにしておいてくれ。わしがそこに門を建てて、お釋迦に差し上げよう。」

こうして世にも稀な大金持と、一國の太子とが、金を惜しまず造り上げたこの精舎は、十六の大堂と、六十の附屬建築からなり、あらゆる設備がととのつていた。その建築費は五億四千金というが、今の金にしたらどの位か、とてもわからない。この莊嚴な大寺院はもと祇多太子の林園のあつた所だから、祇園精舎と名づけられ、無比の大學院となり、また一大社會事業施設ともなつた。

なお、この祇園精舎の東門の外に、間もなく同じような富豪の手により、二億七千金で、東園精舎とよぶ大寺が建てられた。釋迦は四十五年の說法生活の中、祇園精舎に十九回、東園精舎に六回、合せて二十五回この舍衛城の地に夏の雨期を過ごされたという。とも角、祇園精舎は、王舍城の竹林精舎にもまして、釋迦の布教活動の中心地となつたことは疑いないことである。

七、釋迦の歸國と淨飯王の死

——釋迦 かえる——

釋迦が覺を開いてから、またたく間に、インド第一の大國マガダ

國王や、これに次ぐコーサラ國王などの歸信を受け、萬を以つて數えるほどの弟子が集まり、堂堂たる精舎が方々に建つた。こうして新しい大宗教、佛教の教祖と仰がれるようになった釋迦の名は、全インドに、ひびき渡つた。そうになると、生國のカピラ城内でも、いろいろと、うわさが立ち、父淨飯王を初め、宮中をあげて、その歸國を待ちわびた。その頃、淨飯王からは、矢のようにさいそくがあつたらしい。王は一人の忠臣に、千人のお伴をつけて、出したが、みんなそれが、釋迦のところに行くと、出家してしまい、誰一人歸らなかつたという。そこで王は、最後に釋迦と同じ日に生れ、少さい時からの遊び友だちだつたウダイという大臣を使にやつた。その頃、釋迦は王舍城の竹林精舎に、居られたようであるが、そこに着いたウダイは、お別れしてから十年目程の面會で、なつかしい昔のシタダルタ太子の面影を見た。高貴なお姿とそう明な顔立ち、昔のままであつたが、受ける感じは全くちがつた。釋迦は、象



のような重おもしろさと、虎のような猛猛しさをもちながら、春の海のように廣い、そしてのかな氣分に、人びとを包むのである。よもやまの話をしている中に、ウダイもまた、精舎の平和な、そして何の差別もない平等の世界にあこがれて、とうとう頭をそつて、出家をしてしまった。

しかし、流石にウダイも誘い方が上手であつたらしく、釋迦は七日後にカピラ城に行つて、父王にも會おうと約束された。ウダイは飛び上つてよろこんだ。そして坊主頭も忘れて、そのままとんで歸つて、淨飯王に報告した。もちろん、その時の王のよろこびは、大へんなものであつた。王はよろこびが押え切れなくなると、ウダイの坊主頭が餘計におかしく見えて、つい大聲をあげて何度も笑われた。しかしウダイは、王様の親心を察すると、何かしら涙があふれて、そつと眼をふいたのである。

——淨飯王の死——

淨飯王は、出家したわが子シッダルタ太子が、今や佛陀と世間にあがめられる身となつたことを、父として喜び、誇りと感じたであろうが、王族が相次いで出家したのは、あわてられた。殊に釋迦の出家後に、太子と定められたナンダがまた出家し、更に可愛い孫のラーフラーまでが、佛門に入つたのでは、全く王家の滅亡も同様になると、大へん心配された。そこで父王は釋迦にこの事をつけ、今後は子供の出家には、兩親の許可を得なければならぬことに、きめてもらい度いと願つたので、釋迦もそれを至極もつともの道理として、その規則をきめられたといわれている。

この頃、淨飯王はもう八十才をこえる程の老人であつたから、釋

迦は子として、出来るだけの孝養を、つくして上げ度いと考えられたであろう。廣く衆生を救わんとする大願に、一身をささげている間でも、父王のことを忘れて居られたわけではない。

父王の病氣は、老衰病であろうが、ひどく身體がいたんで、苦しんだという。それが釋迦が歸り、一族のものや弟子たちが看病をする、一時にいたみも去つたので、釋迦は父王のために、世間無常の法をといて、心を靜かに安らかに休ませられると、父王も今は佛となつたわが子に對し、心から禮拜した。この時、釋迦は一步進んで、

「大王は、もう清い人となりました。今死なれるに當つて、どうぞ心安らかにされますように。私は大王の子であるが、今は世界無非の佛になりました。ナンダも、アーナンダも、ラーフラーも、それぞれ佛の法に通じ、徳望も高くなりました。どうぞ御心配ないように。」

と話された。父王はよろこびにあふれ、釋迦の手をとつて胸の上におき、合掌して安らかに息を引きとつたという。

釋迦は人々を指揮して、香湯で父王の身を洗い、きれいな布で包んで、ていねいに棺におさめ、そしてみずからその棺をかつがれた。火葬の時に、また釋迦は、

「人々よ、この火葬の火は熱い。しかし欲の火はこれよりも熱い。諸君も早くみずから諸欲の火を消し、ながく大安樂を得られよ。」

と説教し、遺骨を立派な金のはこに納めて、莊嚴な式を終つた。

人々は、佛様みずからの手で、お葬式を営まれた淨飯王こそ、誰にもまして幸福な方であると、あちこちにささやいた。(つゞく)

保育欄

○七月二十三・四・五日、東京小石川淑徳學園で日本佛教保育協會の夏期講習會が開かれる。

講師は椎尾、内山、賀來、本多、久留島、平井信義、清水元長、安藤・草葉(予定)兩國務相。

申込は明德幼稚園内同會へ。宿舍は附近寺院。會費四百圓。同二十六・七日の厚生省の保育研究大會へ連續する向きが多いとみられる。

○八月二・三・四日は名古屋東海學園で宗務所主催の兒童教化保育講習會。内山、林靈法、山田、松濤、鈴木郁郎氏等出講。

○同じく下旬には御殿場で淨土宗保育連盟主催の講習會があり内山、山田、松濤、森、中澤等の諸氏講義。

○五月二十七日、淨保連東京例會が、青山の善光幼稚園で開かれ、昨年度決算報告、本年度夏期行事等を協議する所があつた。

芝園だより

○柳の技につばめがかすめ飛ぶ季節になりました。頃日、年來の讀者の一言に、「ほかのは讀まなくても、後記だけは必らずよむ」と全く以つて責任の重きを感じる次第。○身邊の多事に啣つて、發刊が遅延していることは何とも申しわけありません。ただ海容を願つて渾身の努力を致すのみです。

○正大の私の研究室に入つた學生の一人、同姓なので訊ねたところ誌上おなじみの藤井實應師の令息とのこと。そういえば、鎌倉の密雄先生の子息行信君は、本年より大學院。どうも、ウカウカしていらぬこととなつて來ました。

○原子灰、鏡子ちゃん事件、指揮權發動等の暗い世相の中にも、さがせば美しい灯が輝いていると思ひます。そんな、胸を打つような話讀を者の皆様から寄せて頂いて誌面に少しでも生彩を加えたく、御協力をお願い致します。

○眞野先生の學位祝賀が九日比谷松本樓で教界學界の名士百三十名によつて催されました。嬉しいことには、參會された方々の大部分は、本誌の愛讀者でした。○編集同人の香山氏、去月兼ねて

許婚中の總子さんと結ばれました爾後、氏の筆勢は一段と強まることと内心怖れつつも期待しております。(竹中)

○最早や、國民と離れた別の世界で國會が開かれています。われわれと別の世界の、ジュネーブで會議が開かれています。それでも、その灰をかぶるのは、われわれなのですから、厭になります。

○眞野先生の祝賀會では、淨土同人が大活躍。皆から「どうぞ長生きを」と病身の先生に辭を呈すれば、先生は、「この小人。私は別に長生きを望みません。せめてこの一時を、よりよく生きたいと願つています」と。胸の底からこみあげて來るもので、先生がボーツと見えた。白いハンカチが多くの人

人の目にあてられて居た。○長野の山中から、澁谷賢應氏が東上。淨土に物凄く忠告をして引きあげて行つた。次に出て來るものを期待しています。

○一寸、一身上に變化はありませんが、そんなことには關係なく本誌に微力を捧げます。(安居)

○本誌の特輯によつて、いささか「無常」というものの再認が頂けたらと思う。各先生御多忙の中御執

筆を願つた。豫定の中村康隆は先生御母堂により中止。同御母堂は、本會の草分けの并康先生夫人で、茲に厚く弔意を表する次第であります。○躍起となつて發行日繰上げに努力、七月號も本月中にお届けする見通しがつきました。今日出稿してほつとした所。(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓(十共)、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 六月號

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可

昭和廿九年五月廿五日印刷 昭和廿九年六月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順

發行人 眞野正順

印刷所 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京千代田區神田保町三ノ一
東京都墨田區芝公園五ノ一〇
東京八二一八七
電話・芝(四三)一三二八

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘

用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八五八

お盆の施本原に

特別刷 浄土

お盆のしおり

六月三十日

發行豫定

いつもの體裁の本誌七月號の中の八頁(孟蘭盆のころ——吉田絃二郎、火のいろ——幸田文、心を占領しているもの——村岡花子、お中元と盆——芳賀幸四郎(教育大助教授)、佛教慢畫)に表紙(寫眞入り、寺名、法要月日欄入)付の特別刷普及版浄土を發行しました。法味を廣く一般に普及するためには喜ばれると存じます。之は一部六圓送料八圓、五十部以上五、五圓、百部以上五圓の割です。

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのまつトいで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松管・光明・芝等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

鎖ブランコ2人乗	¥ 12,000
鎖ブランコ3人乗	¥ 14,000
鎖ブランコ4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太 鼓 橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付